

# 人権だより

No.333 (2026.3)

「気付き」から行動へ—「こわさをこえる、その一歩」から—

じんけんどうわきょういくか くにし なるひと  
人権同和教育課 湖西 成仁

さくねん ねんまつ どようび なにげ えひめしんぶん ぜんめん  
昨年の年末の土曜日のこと。何気なく愛媛新聞をめくると全面  
どうししゅさい にゆうしやう けんない しょうがくせい どくしよかんそうぶん  
に同紙主催のコンクールで入賞した県内の小学生の読書感想文  
けいさい ぶんちゆう まほうつかい め と  
が掲載されていました。たまたま文中の「オズの魔法使い」に目が留  
けん ち じしやう じゆしやう きんせいだいいちしやう ねん てらお かんそうぶん  
まり県知事賞を受賞した金生第一小6年の寺尾結羽さんの感想文  
「こわさをこえる、その一歩」をじっくり読ませてもらいました。私が  
かんしん かのじよ なかま こうどう  
まず感心したのは彼女が「こわくても仲間のために行動するライオン」  
ゆうき  
から「勇気とはおそれをなくすことではなく、おそれをこえて進むことだ」



きづ  
と気付いたことです。それは、彼女自身が「こわいから無理」と逃げていたダンスの前方倒立  
かいてん おも の じったいけん かくしん  
回転を、「できない」という思いこみを乗り越えて「できた」という実体験から確信したことで、  
じぶん せなか お せんせい ともだち ほん どうじやう なかま かざ しん あ  
自分の「背中を押してくれた」先生や友達をこの本に登場する仲間たちと重ね、信じ合う  
たいせつ そな じぶん しん ある だ けつ い かた  
大切さを備えて、自分を信じて歩き出す決意が語られていました。

どうしどうじつ きじ ひと しゅっしん もっこうしよくにん  
同紙同日の記事からも一つ。イスラエル出身の木工職人、ダニー・ネフセタイ氏(68  
さい い かた しょうかい こうそつご ぐうぐん せんとうき ゆめ た し  
歳)の生き方を紹介します。高卒後、空軍の戦闘機パイロットになる夢を絶たれたダニー氏  
てさき きやう さ い にほん かぐ がいしや しぎやう さいたまけん やまあい かぐ こうぼう かま  
は、手先の器用さを生かして日本の家具会社で修業。埼玉県の山間に家具工房を構えます  
さいしよ ちゆうもん だい お しき えんたく かれ だい こ  
す。最初の注文がちゃぶ台(折りたたみみ式の円卓)。彼はちゃぶ台に込められた「和」の  
みりよく だれ わ わ へだ おちゆう  
魅力、「誰もがいつでも輪になり、分け隔てなくだんらんでできる」ことに夢中になります。そこか  
ものづく しめい よ しゃかい かくしん え へいわ うた こうえん おこな  
ら「物作りの使命はより良き社会をつくること」だとの確信を得て、平和を訴える講演も行う  
ようになりました。講演で彼は自分の「気付き」の変遷を紹介します。「かつて憧れた戦闘機  
ひと ころ きかいがい なにももの さと もっこうしよくにん つづ いのち つむ たいせつ ふ  
は人を殺す機械以外の何物でもない」と悟った。」木工職人を続け「命を紡ぐ大切さに触れ  
た」と。彼の今の夢は、「自分が作ったちゃぶ台に、イスラエルとパレスチナの人を招き談笑」  
かれ いま ゆめ じぶん つく だい ひと まね だんしやう  
することなのです。差別のない社会を実現するためには、「気付き」を行動に移す勇気も必要  
です。

さくねん ねんまつ きじ さんにん じゅうどうか べつ ひ しょうかい  
これも昨年の年末の記事ですが、三人の柔道家がそれぞれ別の日に紹介されていまし  
ふたり うわじまし つしま みま ちいき しゅっしん ししよくいん かしわださとし さい  
た。そのうち二人は宇和島市(津島・三間地域)の出身。市職員の柏田訓氏(61歳)と  
かの やたいいくだいがくせい ながおかけんしん し さい とも さくねん がつ かいさい せかいたいかい  
鹿屋体育大学生の長岡健心氏(20歳)で、共に昨年11月にパリで開催された世界大会に  
しゅつじやう かしわだし たいかい ながおかし かたじゅうどうせんしゅけん ゆうしやう せかい  
出場しています。そして、柏田氏はベテランズ大会で、長岡氏は形柔道選手権で優勝(世界

一)の快挙を達成しました。柏田氏については社会貢献の一環で、松山大学(母校の松山商科大学の後身)の道場に県内外の小中学生約120人を集めて熟練の技を伝授した、との記事もありました。

もう一人は、五輪金メダリストで日本オリンピック委員会の会長を務めた山下泰裕氏(68歳)。2年前、急病による転倒で頸髄を損傷、首から下がほとんど動かせなくなりました。長期療養から社会復帰しての記者会見で、山下氏は「ありのままの姿をさらけ出し、障がい者を身近に感じてもらえたらいい。これからは自分のできる活動をしていこうと考えている」と語りました。山下氏は現在、母校の東海大学の体育学部特任教授として「柔道論」を週1度担当。リハビリと並行しながら来年度も続けていくことにしています。人生はそれぞれですが皆さん、自分にとっての悔いを残さない、自分を大切にしたい生き方を心掛けていきましょう。

## 【人権委員の声】

差別のない社会を実現するには、「気付き」を行動に移す勇気も大事という言葉にとっても共感しました。(3年生 人権委員)

「勇気とは、おそれをなくすことではなく、おそれを越えて進むことだ」という言葉を聞き、乗り越えた先に何か良いことがあると改めて気付きました。おそれては何も始まらないのでおそれに向かって何事にも挑戦しようと思いました。(3年生 人権委員)

僕は今まで「気付き」に気付いても、失敗したらどうしようというような感情のせいで行動に移すことができないことの方が多かったけど、これからはしっかり行動に移してより良い自分になれるようにしていきたいです。(3年生 人権委員)

「勇気とは、おそれをなくすことではなく、おそれを越えて進むことだ」という文章を読み、私は今開催されているミラノ五輪での選手の活躍を思い出しました。スキージャンプやスノーボード、フィギアスケートなどたくさんの種目がありますが、どの選手も不安やプレッシャーに打ち勝ち競技しています。怪我をしても強い精神力で痛みを乗り越えている選手もいます。まさに「おそれを越えて進んでいる」という表現がぴったりです。(3年生 人権委員)

紹介されていた人たちは、怖さや困難があっても、自分の思いを大切に前に進んでいますすごいと思いました。自分の経験を通して周りの人や社会のために動いている姿が印象に残りました。私も気付いたら行動できる人になりたいです。私も悔いを残さないように自分を大切にしていきたいです。(4年生 人権委員)

気づいたら、行動へ移すまでが大切なのだなと思いました。気づいて見て見ぬふりをせず、ちゃんと注意をしたり、行動に移したりしようと思いました。(4年生 人権委員)

「できない」という思い込みで逃げず、乗り越えて自分自身を信じる大切さに気づきたいです。また、ありのままの姿をしっかりと出し、自分にとって悔いのない生き方をしたいです。(4年生 人権委員)



後悔をしないように勇気を持って挑戦することが大事だと思いました。(4年生 人権委員)  
これからも人生を大切に生きていかなければならないなと思いました。(5年生 人権委員)